
「きっと、それは」のほかのおはなし

篠宮 楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「きつと、それは」のほかのおはなし

【Nコード】

N3376W

【作者名】

篠宮 楓

【あらすじ】

「きつと、それは」の番外編を集めたおはなしたち。リクエストで頂いたお話を書いていきたいと思えます。

ご説明をば

読んで頂く前に――書き手よりご説明の場――

篠宮です。

いつも読んでくださってありがとうございます。

「お礼SSお題を下さいアンケート」、多くの皆様にぼちり&ご感想・コメントを頂き、本当に嬉しいです。

1話で終われば本編に組み込もうと思ったのですが、ちょっと長くなってしまって^^；

リクエストでもいくつかお題を頂いたので、新たに立ち上げてしまおうと思い立ちました。

今回お題は「圭介と由比のデート」
さてここで、皆様にお願いが……

下記言葉を、脳内インプットお願いします。
暗示です！自己暗示で！（笑）

「圭介と由比は付き合っている」

本編ではまだ誰とくっつくか決まっていななのですが、ここはパラレルワールドin圭介と由比がくっついた！　な、世界です（笑）

では、お楽しみくださいませ！

「おはよう、由比さん」

ほわほわな笑顔が目の前にあって、起き抜けの私の頭は真っ白になった。

三月も終わりの晴天の今日は、お出かけ日和に誘われて外出している人が多いらしく、高速は渋滞ランプが点灯していた。

違えることなく同じ様に高速道路上を移動中の私達も、さっきからほとんど動いていない車の中だ。

「くっ、ふっ、ふふっ」

運転手にはまったく嬉しくないだろう状況のはずなのに、ハンドルを握る圭介さんからは抑えきれない笑いが漏れ聞えてくる。

私は助手席の窓から外を睨みつけるように眺めながら、指先を忙しなく動かした。

くうっ、何たる失態。

「あ」

今更ながら口元を手の甲で拭って、よだれの有無を確かめてみたり。

……って今更過ぎるわ！

内心の葛藤を余所に、じっと外を睨みつける態度は変えられない。

八つ当たりって言われてもいい！

だって、八つ当たりだもんね！！

翔太が卒業旅行と称して高校の友人と出かけるからドライブに出よう、と誘われたのが三日前。

わざわざ夕飯の時に言うもんだから散々翔太にからかわれて、恥ずかしいったらありやしない。

泊まってくればとか余計な事言うから、変に意識してよく眠れなかったのだ。

昨日も仕事中に寝そうになって、桜に笑顔で肘鉄されてしまったというのに。

で、緊張したまま今日。

どこに行くのか言われないまま連れ出されたのが、朝の七時。

眠くなるよね！

どー考えても、眠くなるでしょ？！

で、つつい居眠りしていた私の顔を、サービスエリアに休憩で車を停めた圭介さんが観察していたと。

って、いつの間に高速に乗ったんだ！　そこもびっくりなんだけど！　とりあえず。

——圭介さんが悪いよね！？

朝からの行動を思い出して、再びむきーと頭に血が上りかけた時、ふわりと温かい掌が頭の上に乗った。

それは宥めるように、ゆっくりと前後に動く。

「もうそろそろ機嫌直して？　ずっとそっちばかり見られてると……」

……と？　切られた言葉の先が気になって窓の外を見たまま、続き

を待つ。

「……入りたいのかなって、思ってしまったんだけどね？」

その言葉を聞いて今まで見るだけであまり認識していなかった窓の外の風景を、急速に認識する。

私が睨みつけるように見ていたお外には。

「高速の傍には多いんだよね、なんでだろう」

きらきらとかシツクとかお城とか、いろんな某ホテルがありました。

って、あんまり見たことないけど、なんでこんなに沢山あるの!?

うーわー、噴水とか……

思わず珍しいものを見る好奇心で目が離せなくなっていた私に、いたって真面目な声が振ってきた。

「あ、本当に入りたかった？　なら、その出口で降り……」

「ななな、何言ってるの!？　そんなわけないし!　違うし!」

慌てて圭介さんに顔を向けると、思いのほか傍にあった顔に驚いて身体を引く。

途端、頭と背中を助手席のドアにぶつけて、大きな音を上げた。

きょんとした圭介さんの顔が、にーくーらーしーいーっ!

その後の大爆笑に、私の八つ当たりゲージはマックスに振り切れた。

「そろそろ機嫌直して、由比さん」

さっきと同じ言葉を繰り返す圭介さんの声は、さっきよりも困惑気味に変わっていて。

本当に許して欲しいのが伝わってくるけれど、私は頑なにそっぽを向いたままだ。

っていうか、もうほとんど怒りとか冷めてるんだけど、なんていうの？

そう。

引っ込みがつかない。

ゆえに、怒っているつもりでぶんぷんとそっぽを向いたまま歩いているわけですよ。

圭介さんは私の後ろからついてきていて、困ったなあと小さく呟いているのが聞えてくるんだけど。

ずんずんと歩いている私も、実は一体どこに向かえばいいのかよくわからないまま足を動かしている。

うん、お願い。誰か止めて。

圭介さんが連れてきてくれた場所は、少し山に入った場所にある湖。アパートから三時間くらいは車で走ったんじゃないかな。

きらきらと陽の光が散る湖面は、息を呑むほどに綺麗。

アパートの前の川面も綺麗だけれど、スケールが違うというかなんというか。

遠目で見えたその光景に惹かれて、圭介さんの謝罪の言葉も聞き流しながら湖の畔に廻らせてある柵に両手を置いた。

段々暖かくなってきた気候は、三月が終わり春へと移行していくその途中。

時折吹き抜ける風は、微かに肌に冷たい。

カーディガンを着てきたけれど、それでも首筋を撫でる風に結んでいた髪を解いた。

さらりと風に揺れる髪は、首筋を温めてくれる。

「髪、伸びたね」

いつの間にか横に来ていた圭介さんが、指を髪に絡めて梳く。

少しくすぐったくて目を細めると、少しぎこちない表情の圭介さんが視界に入った。

けれど、それだけ。

何も言わずにそのまま視線を戻すと、斜め上の方でこくりと喉がなった。

「由比さん、本当にごめんなさい。許してもらえないかな」

まだ目は合っていないけれど、さっきぶりに見た圭介さんの表情は

とても暗くて。

しかも、ごめんなさいって。

二十八才。私よりだいぶ上。

思わず、くすりと笑ってしまった。

それを拾ったのか、髪を触っていたその指が首筋にまで降りて。

「許して、もらえるかな」

するりと辿って肩に行き着いた手は、そのまま。

すぐ傍で聞こえてくる低い声に、さっきまで圭介さんの反応を楽しんでいた私はびくりと肩を震わせた。

ちよっちよっちよっ……、いや落ち着け私！　こ、これは、あれだ！　ほら！

ばくばくと早まってきた鼓動が、どんどん血を送り出してくれるから全身が熱くなってきた。

いや、あれだから！　ほら、あれなんだよ！！　↑どれなんだよ！

脳内のりつつこみを盛大にかましながら、落ち着け落ち着けとぎゅっと拳を握る。

ととと、とにかく許さなければ肩に乗ったままの手を外してもらえないだろう事はよく分かったから！

ぎこちない動きでこくりと頷けば、頭の上でほっと息を吐く音が聞こえた。

「よかった。本当に、どうしようかと思った」

いや、私は今どうしたらいいのか分からないんですが！！

頷いたのに！ 許したのに！ 肩のお手々が外れません！！

「でも、そこまで怒んなくても。由比さん、幸せそうに寝てるから見ていただけなのに」

眠かったんだって！ とにかく手をどけようよ！

なんだか温かくてドキドキするんですってば！

「聞いてる？」

「うあつ、はいっ」

思わず元氣よく返事をすれば、少し間を空けて圭介さんが微笑む。

「やっと由比さんと二人になったのに。ね？」

「いやっ、あのっ……えっと」

確かに、怒りすぎだとは思います！

途中で怒りは冷めてたけどきっかけがつかめなかっただけで、つんつんしてましたから。

そんな罪悪感のまま謝れば、圭介さんは小さく頭を振った。

「私の方が悪かったなって思うから、由比さんの言う事、何でも聞いてあげるよ。それで許して？」

「へ？」

思いがけない言葉に、肩に置かれた手の恥ずかしさよりも驚きの方が上回った。

顔を上げて圭介さんを見上げる。

そこにはほんわか笑みを浮かべる、いつもの圭介さんのお顔。

「何でもいいよ？ そうだなー、例えばネックレスとか指輪とか、服とか。欲しい物があれば……」

「なっ、ないない！ いらないし！ 大丈夫だし！ お互い節約家族だし！」

思わず叫んでから、がばっと両手で口を塞ぐ。

「……」

最後の言葉は、要らなかったよね。
大人の男の人に。

口を塞いだまま顔を伏せると、そうだね、と切なそうな声が聞こえた。

「……甲斐性無しで申し訳ない」

3

「ちちち、違っ！ 今のナシ！ 忘れてっ！」

慌てて身体を離してシャツの裾を両手で掴むと、必死になって否定する。

圭介さんは私の肩から外れた手を見ながら、それを下ろした。

「じゃ、お金の掛からないものでお願いできますか？ 由比さん」

うーあー、敬語だし！

さっきとは違うのだらだと背筋を伝う汗に、脳内パニックに陥る。

「ごめんなさいっ！ 本当に、今のはっ、そんな意味じゃなくて！」

するといつもの笑顔に戻った圭介さんは、分かっているから、と頭を撫でてくれた。

「意地悪してごめん。さ、行こうか。由比さんが喜んでくれるかなって思って、ここに来たんだから。堪能してもらわないと」

再びさりげなく肩にまわされた手に、先を促されて足が前に出る。けれど罪悪感に苛まれていた私は、掴んだままのシャツの裾を引っ張った。

「あのね、あの」

何か、何か言わなきゃ。

そう焦れば焦るほど何も欲しいものなんて、浮かばなくて。でも、もし何かもらえるのだとしたら……

「……なんでもいい」

「なんでも？」

いきなりの言葉に、圭介さんが首を傾げる。

「だから……、圭介さんが私にくれるものなら、その、なんでも……」

パニックと勢いのまま口にした言葉は、よく考えれば思いっきりおねだり状態だったんだけどその時の私は全く気付かなかった。

足を止めたまま私を見下ろしていた圭介さんは、ふんわりと笑うとぽんぽんと頭を撫でた。

「うん、分かった。じゃあ、私が考える由比さんが喜ぶもの。それをあげる」

だから、楽しもう？　と言われて、私は満面の笑みを浮かべた。

「そしたら私も、私が考える圭介さんが喜ぶものをあげるね！　それでおあいこ」

「私が喜ぶもの？」

「うん」

圭介さんは少し呆氣に取られた表情をしていたけれど、目を細めて口元を緩めた。

「私の欲しいもの、由比さん分かるかな」

「え、分かるよ！　絶対当てる！」

今度こそ肩に触れた手に促されるまま歩き出すと、圭介さんは意地悪そうに口端をあげた。

「それは楽しみだ。是非とも当ててもらわないとね」

「うんっ」

ふふふ、絶対当てて驚かせるんだから。

やっと気まずい雰囲気が消えて、気持ちが浮上する。

せっかくの綺麗な風景、せっかくの圭介さんとお出かけ。

楽しみなきや、もったいないよね。

上機嫌で圭介さんに促されるまま歩いていた私は、ふと視線を向け

た先の湖に浮かぶ水鳥に目が止まった。

気持ち良さそうに浮いている姿が、あんまりにも可愛くて。

鼻歌でも歌いたくなりそうな状況に、頭の上から聞えた言葉をつい聞き逃した。

「……俺の欲しいものが分かったら、知らない振りは許さないから」
「……う？」

何か言ったのは気付いたけれど、内容まで聞き取れなかった。

ただ……なんか今、不穏な空気が駄々漏れてきました……

ゆっくりと斜め上にある圭介さんを見上げると、いつものほわほわ笑顔で私を見つめている。

「じゃ、お昼食べに行こう？」

「え？」

つい問い返すと、不思議そうな顔をされてしまった。

「あれ？ まだお腹すいてない？」

「えっ、空いてる空いてます！」

慌てて返答しながらも、内心首を傾げる。

あれー？ 私の勘違いかな？

なんとなくもやもやが残りつつ、圭介さんに提示されたお昼ご飯の候補を聞いて私の意識はするっとそのもやもやを忘れ去った。

3 (後書き)

あれ？ 圭介黒すぎ？

お昼ごはんは、湖の畔にある二階建てのカフェに入った。
パスタとピザがメインらしくて、それを圭介さんと取り分けて食べる。

なんか……、嬉しいような恥ずかしいような。

圭介さんと付き合い始めたといっても、生活は特に変化もなくて。
駅への送り迎えだって、圭介さんも翔太もしてくれる。

ご飯も三人で食べるし、少し前に終わった翔太の受験もあって二人
で出かけることなんて皆無だったから。

やっぱり……、嬉しいかなあ……。

無意識に顔がへにやりとしていたらしい。

ふと視線を上げると、穏やかな表情の圭介さんと目が合った。

見られていたことに気がついて顔を赤くする私に、指先を伸ばして
頬をするりと撫でる。

「喜んでもらえてるみたいで、よかった」

「う、ん」

ぎこちなく返事をする、クスリと笑ってその手を下ろした。
けれど、それはそのままテーブルに置いていた私の手に下りて。
手まで赤くなってきた私を宥めるように、ゆっくりと撫でた。

なんか今日はスキんシップが多いんですがーっ！
長い指で手の甲をゆっくりと撫ぜる状態は、目にも毒です。

私はとりあえずその状態から抜け出すべく、なんとか場を和ませながら手を外してもらおう計画を立てて実行してみた。

「えと……、あの。けっ、圭介さんってば、今日は触り魔ですねっ」

ははっ、と笑いながら触られたままの手を引っ込めようとしたら、反対にぎゅっと掴まれていきなり立ち上がった圭介さんに引かれるように腰を上げた。

「わっ」

テラス席でまだあまり人がいなかったからよかったものの、店内だったら注目されそうな音が椅子から上がる。

「け、圭介さん？」

「出ようか」

突然の行動に首を傾げつつも、私の返事を待たずに歩き出した圭介さんの後ろをバッグを掴んで慌ててついていった。

ここまで連れてきてもらったお礼にお昼ご飯を奢らせてもらいたいとレジにつくまでに申告してみたけれど、聞く耳持たず。

ちらりと寄越された視線に、押し黙りました。

いやー、なんていうか絶対圭介さんて……頑なだよね。

んで、長男だよね。

世話焼きと言うか、なんというか。

会計を済ませて外に出ると、圭介さんはレジでは離していた私の手を再び握って湖へと歩き出した。

これからお昼時を迎える時間帯、さっきよりも人が少ない散策路に足を踏み入れる。

日の光を遮る茂った木々の間を縫うように、小道が湖に沿って続いていて。

そこをゆっくりと歩きながら、黙ったまま私の手を引くの圭介さんの背中をみて首を傾げるばかり。

なんなんだろう、今日の圭介さんは。

人のことをからかっているのかと思えば、黙っちゃうし。

手を繋がれていることよりも、圭介さんの態度の方が気になって仕

方がない。

しばらくそのまま歩いていたら、さすがに何か話した方がいいのかなと口を開こうとしたら圭介さんに先手を取られました。

「その、ごめん」

しかも、謝罪でした。

……何事？

いきなり下げられた頭に動揺して、しどろもどろのままなんとか顔を上げてもらう。

その顔は……

「あれ、赤い？」

ほんのりと赤かった。

私の言葉に、圭介さんは気まずそうに片手で口元を押さえる。でも、赤い目元は隠せていない。

さっきとは逆の状態に困惑して、私は首を傾げつつ圭介さんを見上げた。

「どうかしたの？　なんで謝るの？」

赤いし、謝られるし。

まったく意味が分からない……

圭介さんは一度目を瞑って息を吐き出すと、口元を覆っていた手を外した。

「触り魔」

その言葉で、あぁっ、と納得する。

圭介さんは困ったように赤い頬を指先で撫ぜながら、それでも聞えるようにもう一度謝りの言葉を口にした。

「その、ごめん、ね？」

というか、その一言を気に病まれるとは思わなかった。

慌てて繋いだままの手を、ぎゅっと握り締める。

「怒ってるとか、嫌がってるとかじゃないんだよ？　ただ、その。

普段そーいうことしない人だから、恥ずかしいって言うか……慣れないというか……、意外と言うか」

なんかほら圭介さん冷静な人だからさ、と言葉を続けるとなぜか目を細めた。

あれ？

なんとなく、纏う空気が変わった……？

圭介さんは私を見つめたまま、繋いでいる手を持ち上げる。

「……冷静な人、だから？」

ぽつりと呟いた声は、いつもより低くて。

ただ手を持ち上げられているだけだというのに、なんで私の心臓は全力疾走中なのだろう。

「触れないでも、平気、だど？」

切れ切れのその言葉は、ゆっくりと脳内を侵食していく。
手を持ち上げて行くのと同時に、圭介さんが上体を前に傾けていつて……

「由比」

そう名前を呟くと、視線は私に固定したままその唇を手の甲に落とした。

手に触れる、柔らかくて温かい感触。

見上げてくる、射すくめるような強い視線。

背筋に、ぞくりと何かが走る。

痺れみたいなの、不可解な感覚。

「……っ！」

思わずびくりと体が震えた。

圭介さんは私に震えに気付いているはずなのに、手の甲に触れたままその唇を動かす。

「……由比、君と想いが通じた時から……いや、正直に言う。その前からずっと、触れたくて仕方がなかった」

手の甲に触れていた唇が、ゆっくりと指先に移っていく。
辿った場所に、熱が生まれて……

「その指に……」

持ち上げられた指先に、ちゅ、とリップ音を小さく響かせて吸い付く。

いつの間にか、左手が私の頬を撫でていて。

その指先が撫でた場所を、唇が追うようにして辿って行く。寄せられた唇が、頬から額、そして反対側の耳へと降りる。

「頬、額、……耳」

耳朶を唇に食まれて、ふろりと肩が震えた。

微かに、耳元で笑みを零す声が聞える。

けれど、私はその場所に縫い止められた様に動く事ができなかった。

「首筋」

「……ひゃっ」

くすぐったくて、身を振る。

いつの間にか腰に回っていた腕が、私の動きを拘束した。

大げさなくらいびくつく身体を抱きしめて、圭介さんはしばらくして小さく息をついた。

ぽんぽん、と、小さな子供を宥めるように私の背中を軽く叩いて。

「なかなか二人きりになれる機会がなくて、……ごめん。今日、ちよつと籠が外れてたかもしれない」

怖がらせてごめんねと、体を離しながら圭介さんがやっぱり困ったように微笑んだ。

「一応、俺も男だから。」

好きな人が傍にいれば触れたいし、抱きしめたい。それに……」

視線を上げれば、眼鏡の奥、熱を孕んだ目がじつと私を見つめていて。

恥ずかしさに、思わず目を伏せた。

確かに手を繋いだり、肩を抱かれたり。そんな事はあったと思う。けれど、明確な意思を持った触れ方……その奥にある熱情……を感じさせられる事は、なかった。

自分に大人の魅力が足りないからと、思っていたけれど……

きつと私の為に理性で覆い隠してくれていたんだと、今、気付いた。

圭介さんは私の態度をどう解釈したのか、右手でゆっくりと頭を撫でると表情を戻しながらもう一度ごめんねと苦笑した。

「年上なのに、申し訳ない」

さ、行こう？ と立ち尽くしたままの私を促すように、背中に触れた手に力が入った。

それに逆らわず二・三步足を進めてから、きゅっ、と唇を引き結ぶ。

ばくばくと、まるで心臓が耳元にでもあるように鼓動が聞える。

恥ずかしい、本当に恥ずかしいけど……

ああ、でも。

でも——

私だって……！

「私、も」

立ち止まった私を不思議そうに振り返った圭介さんの手を、ぎゅつと握り締める。

うーっ、恥ずかしいっ！

これ、あえて口に出すとか、凄く恥ずかしいんだけどっ。

「由比さん？」

またさん付けに戻った呼称に少しだけ寂しいと思う今の私なら、言える……はず！

伏せていた顔を、勢いをつけて上げる。

少し驚いたように、目を見開く圭介さんの顔。

「今日二人きりでっ、その……嬉しい、……です」

最初こそ勢いで言ったものの、語尾がどんどん小さくなっていく。だって、じっと見てくるんだもの。

再び目を伏せた私に、くすりと笑う圭介さんの声が降りた。

「ありがとう。さ、行こう？」

「え……っ」

その声はとても穏やかで。

さっきみたいに、熱を孕んだものじゃなくて。

気を使っていると、勘違いされたようで……っ。

握って握られていた手を、思い切り振りほどく。

「……由比さん？」

驚いたように、歩き出した圭介さんが足を止めた。

目を見開いて、外れた自分の手と私を交互に見つめる。

「由比さん？」

戸惑ったようなその姿に、どうしていいのか分からない自分の中のもやもやが一気に膨れだした。

「私も、二人きりに、なりたいてずっと思ってた！ 圭介さんに気を遣って言ってるんじゃないかってっ、だから今日も、本当は凄く嬉しくて……！」

ああ、言ってる事が、ちぐはぐだ。

感情のままに飛び出す言葉は、收拾がつかない。

唯一の救いは、昼時……しかも湖から少し離れた散策路と言うこともあって、辺りに人影が見えないことだろうか。

「嬉しいけど、その、恥ずかしくてっ。触れてもらえて嬉しいけど、心臓が、ばくばくで。どうしていいのか分からなくて……！」

だからあんな事言っちゃって……そう続けると、ぽんぽんと頭の上に大きな温もりが落ちた。

顔を上げれば、その重みがゆっくりと前後に動いて私を宥めてくる。

圭介さんは、目を細めて嬉しそうに微笑んでいた。

「うん、ありがと。嬉しいよ、由比さん」

「嘘じゃな……！」

また流されてしまうのかと思って言葉を言い募ろうとした私の口を、圭介さんが指先でつついた。

「分かってる。私が急いただけで、同じ気持ちだって事、分かったから。だから、“ありがとう”」

ほんわかと笑うその表情に、強張っていた体から力が抜けて思わずしゃがみこみそうになる。

圭介さんは、おっと……と小さく呟いて私の腰に腕を回して支えようと、反対の手で手を握った。

「二人きりで、いたいと思ってくれてたんだ」

「うん」

「あまり、そういう風には見えなかったけど。今日だって、私が連れ出したようなものだし」

確かに、翔太が卒業旅行に行く事は聞いていたけれど、特に圭介さんどこかに行こうとか思ってたなかった。

ただ……

「アパートで、二人になれるかなって、そう思ってたから」

だから、どこかにわざわざ行かなくてもいいと思ってた。

そう続ければ、そうだったんだと圭介さんが笑う。

「私ばかりが焦ってるのかと、思ってたよ。その言葉が聞けただけでも、ここに来てよかったな」

「圭介さん……」

気持ちを通じて、嬉しくて、握られた手をぎゅっと握り返す。

大きな掌と、温もりが凄く嬉しくて。

「二人きりって、恥ずかしいけど……嬉しい」

アパートで二人といっても、階下には人がいるし顔見知りだ。

おかずやお土産のやり取りだってするし、いきなり来訪したりもする。

みんなの事は好きだけど、でも、やっぱり圭介さんと二人でいる時に来たら恥ずかしい。

だから本当に二人になりたいなら、外に出るしかないってことに気

付かなかった。

そう伝えると圭介さんは何か思いついたように、ああそうだ、と呟いた。

「じゃ、私から由比さんに、二人きりの時間をあげようかな」
「え？」

腰に回された掌が背中に上がって、促されるように歩き出す。

気がつけば背後から人の声が聞こえてきて、さすがにずっと立ち止まっているのは不自然だからと言うことなんだろう。

歩きながら圭介さんの言葉に、小さく首を傾げた。

すでに今、二人きりの時間を過ごしてる。

これ以上に、何をくれるというのだろう。

不思議そうな表情の私の頬を、圭介さんの指先が擦る。

くすぐったくて目を細めると少し真面目な顔になった圭介さんは、その指先で顎先まで辿ってそのままはなれた。

「由比さんの顔に、書いてある。二人でいたいって」

嬉しいな、とさっきと同じ言葉を呟いて、前を向く。

心なし、顔が赤く見えるのは圭介さんも照れてるんだろうか。

「うん。二人で、いたい」

恥ずかしいけれどちゃんと伝えたくて、圭介さんを見上げながら途切れ途切れだけ言葉にして気持ちを伝える。

へにやりと笑うと、圭介さんありがとうと嬉しそうに笑ってくれた。

「では、また後ほどお伺いいたしますので」

「ありがとう」

「……」

えーと、ね。

うん。

今、私の頭の中をあらわすなら、何もない。

真っ白。

散策路を後にした私達は、湖畔を散歩したりお土産を見たりのんびりと過ごした。

穏やかな時間を過ごせて、本当に嬉しくて。

夕暮れを迎えて、それでも手を繋いだまま色々話して。

もうすぐこの時間も終わるんだなあって、内心少し寂しくなりながら……。

圭介さんに促されるまま、歩いて。

歩いて。

て。

……で。

なぜか、和風の旅館に辿り着きました。

何の躊躇もなく旅館の中には行って行く圭介さんを慌てて追いかけると、なぜか宿泊が予約されていて。

あれ？ あれ？ と戸惑っているうちに、仲居さんに部屋へと通された。

私が状況を把握する前に。

圭介さんと向かい合って座っている卓状台の上には、豪華な和食な料理が並んでいる。

着物姿の仲居さんが、無駄のない動きで襖を閉めて外へと出て行った。

「さ、食べよう？」

にこにこ笑う圭介さんが、お箸を持って私を促す。

「え、うん」

思わず頷きながら箸を手にとって、動きを止めた。

いやいやいや、ここは流されている場合じゃない。

「ええと、圭介さん。これって、なんでしょう」

手元を見ていた視線を上げて圭介さんを窺うと、これ？ と不思議

そうな顔をされてしまった。

いや、そんな顔したいの私なんだけど……。

「ああ、和食じゃなくて洋食の方がよかった？」

昼が洋食だったから和食にしてみたんだけど……、そう言う圭介さんに思わず突っ込みを入れたくなる。

「そうじゃなくて、和食は好きなんだけど」

「それならよかった。由比さんのご飯が一番おいしいけれど、お互いに遠慮せずゆっくりできるかなと思って。ごめんね、少し驚かせちゃったかな？」

疑いの目を向けていた私に、圭介さんは穏やかに目を細めた。

「由比さんが嫌がる事はしないから。ね？」

その言葉に、頬が熱くなる。

そうだよ。圭介さん、優しい人だし。何を自意識過剰になっているのやら。

恥ずかしさを誤魔化すように、私は目の前のお造りを口に入れた。程よく脂ののったマグロは、当たり前だけどスーパ〜とかで買う盛り合わせとは全く味が違って。

思わず頬を押さえて、にへらと笑う。

「おいしい」

そう呟くと、嬉しそうに圭介さんが微笑む。

「喜んでもらえて嬉しいよ。アパートでもいいけど、やっぱり初めて二人きりになるんだから少しは格好付けたいなと思ったんだ」

「変に勘繰ってごめんなさい」

ら小さく頭を下げると、圭介さんはそんな事ないよと箸を動かす。

「……勘繰りじゃないし」

「え？」

おいしい夕飯に意識を向けていた私は、ぽつりと呟いた圭介さんの言葉を聞き逃した。

箸を銜えながら視線で問い返したけれど、圭介さんは笑ったまま何も答えなかった。

うん、後で思えば、はめられた瞬間だったかな。

食事を終えた後はお互いに大浴場で温泉に入ったり、外を散歩したり、のんびりと過ごした。

唯一恥ずかしいといえば、浴衣を着ていることかな。

着替えがないから仕方ないけれど、絶対丹前は手放しません！

ていうか促されるままここにきてご飯食べて浴衣着て……、うん、流されてるよね。

絶対流されてるよね。

ていうか、圭介さんってば……

そんなことを考えながら部屋のドアをくぐって板襖を開けた私。

「……」

目の前の光景を見たら、冷静な自分が戻ってきた。

散歩から戻ってきた私達の目の前には、仲良く並んだ二つのお布団。そりゃそうだ。どー考えてもそうだ。

うん、仲居さん。あなたのお仕事、正しいと思うよ！

そりゃ年頃？ の男女が宿泊すればこうなるよね？

いや、年頃じゃなくても、同じ部屋に泊まる時点で友人だろうが恋人だろうが家族だろうが、布団の並びはこうだよね？！

部屋に入っすぐ立ち止まって固まっている私の後ろから、するりと圭介さんが部屋に入る。

「やっぱりこういうところの布団は、ふかふかだ」
と、なんでもない世間話の言葉を口にしながら。

ねえ、恥ずかしくないの？
恥ずかしくないんですか？

布団を触っていた圭介さんが、いまだ立ち尽くしている私をちよいちよいと手を振って傍に呼ぶ。

けれどさすがにお鈍な私といえど、目の前のこの状況に、わくいか声を上げて傍によるとかできなかった。
ていうか、できるかいっ！

圭介さんはそんな私を見上げて笑うと、よいしょと声を掛けて立ち上がった。

「……っ」

うおっ、意識し始めるとかなり恥ずかしいよ！

いや、この状況になる前に意識しようよって自分突込みを試みたけれど、かなり後の祭りだし。

ばくばくと早まる鼓動にくらくらしながら耐えていたら、目の前に立った圭介さんの胸元が視界に入った。

「……」

浴衣の袷から覗く鎖骨が、色っぽいんだってば！！

何あほなこと考えてるんだろうって慌てて意識を変えるように、頭を振る。

そんな事をしていたら、ぱたりと後ろで板襖が閉まった。

いつの間にか圭介さんの腕が後ろに回って、板襖が閉まったと同時に身体を絡めとられる。

「けっ、圭介さ……っ」

「可愛いなあ、由比さん」

ぽんぽん、と宥められるように背中を撫でられて、それでも全く宥まらない心情にぎゅっと両手で拳を握った。

なんで圭介さんはこんなに普通なんだっ。

焦ってるのが自分だけの状態に、なんだか面白くない気持ちが膨れ上がる。

そうだよね、そーなんだよね。

「なんか、扱い、慣れてる」

ぼそりと、さっきから考えていた事が口をついた。

「え？」

よく聞えなかったのか圭介さんが少し身体を離して、顔を覗きこんでくる。

けれどちゃんと目を合わせられなくて、顔を伏せた。

「女の人の扱い、慣れてて。……なんか、嫌」

「由比さん……」

そして全く焦っていない圭介さんの態度が、なんか面白くない。

ドキドキしているのは、お子様な私だけですか。そーですか。

無意識に口を尖らせていたらしい。

くすりと笑う声に、もっと面白くなくなってそっぽを向いた。

そりゃ二十八歳の男の方ですから、こーいう経験あるんでしょうしね！

二十三歳で経験なくて、すみませんねっ。

「由比さん」

不貞腐れ気味の私の頭を片手で包みながら、圭介さんは自分の胸に

頭を押し付ける。

「慣れてる、かな？」

「？」

耳からダイレクトに伝わってくる声と共に、どくりどくりと聞えてくる音。

圭介さんは私の頭を撫でながら、背中にまわした腕に力をこめた。

「私だって、緊張しているよ。慣れているわけじゃない」

通常よりも早いだろうその鼓動は、圭介さんの言葉を真実として伝えてくる。

「怖がらせたくないけれど、二人になりたかったから。今日はだいぶ頑張ったけどね」

「頑張ってたって……」

頭の上から聞える、軽く笑う声。

「由比さんに警戒心を抱かせないように、ここに誘導」

「ゆっ……!!」

やっぱり、誘導されてた!!

思わず顔を上げたのが、まずかった。

吐く息が絡むほど、傍に。

目の中に映る自分が見えるほど、傍に。

圭介さんが、いた。

ひくり、と息が止まる。

その眼差しは、散策路で向けられた、あの――

意識した途端、背中に痺れが走る。

思わず声を上げてしまいそうになって、ぎゅっと唇を引き結んだ。

射すくめられるようなその視線に耐えかねて、距離をとろうと身体を後ろに引く。

するとそれまで私を拘束していた腕が簡単に外れて、とん、と板襖に背がついた。

「由比さん」

胸に手を当てて呼吸を整えようとしていた私を、覗き込むように上体を屈めた圭介さんが呼んだ。

唇に近い、吐息。

甘い、声。

いつもより、低音の、あの昼のような……

勝手に強張り始めた体のまま、小さく返事をする。

喉を振り絞っても、蚊の鳴くような声しか出ない。

何か、話を変えよう！

話題転換の術だ！

だって、そーじゃないと、馬鹿なこと口走っちゃいそうなんだもの！！

私は殊の外明るい声で、話を変えてみた。

「今日は、私の欲しいものをくれて、ありがとう！ お金使わせちゃって、ごめんね？」

って、またお金の事言っちゃったしっ！！

口に出してからしまったと後悔しても、意味がない。
っていうか、昼の反省はどこに行った私！

目を合わせた圭介さんは一瞬驚いたように目を見開いた後、くすりと笑いを零した。

「また、お金のことを言う」

「……ご、ごめんなさい」

節約小市民なもので。

後悔してはみたものの、いい感じに甘い雰囲気弱まった。

ああ、よかった！

いい仕事したよ、私。

内心ガッツポーズで雄たけびを上げていたんだけど。

「由比さんが欲しいものをあげられて、私も嬉しい」

外れていたはずの圭介さんの掌が、私の頬に触れた。

——あ、あれ？

鼓動が早まると同時に、指先で頬を擦られて目を細めた。

そのままその指先が、唇をゆっくりと撫でる。

ふにふにと感触を楽しみように押しては、たまに唇の合わせ目に指先が侵入してくる。

ちよっ、ちよっ……っ

視線だけ上げて圭介さんを見上げると、やっぱりあの目で私を見えています！

今、甘い雰囲気、ほぼ消えたよね？

何でまた、復活した？！

「……嫌？」

嫌って、何が？

先生、主語下さい！！

脳内パニックは全く落ち着いてくれなくて、ぎゅっと目を瞑ったまま圭介さんの視線から逃げる。

「……俺の欲しいもの、くれる？」

ぽつりと落とされる言葉が、体の痺れを助長した。

足元から、背筋から、這い上がってきた不可解な痺れが意識まで侵食し始める。

主語知らない……っ
余計、追い詰められた……っ！

ばくばくと全力労働中の心臓が、オーバーヒートで壊れそうです。
顔が熱い。
真っ赤になっていること請け合い。

圭介さんの、欲しいもの。

きつと、それは――

私からの、キス。

いや、キスが嫌とかじゃないですよ？
全くした事が無いのかといわれれば、付き合う前に、圭介さんとしたことあるし。
けどそれはこう勢いと言うか、要するに、“した”んじゃないって“された”んだもの。

それだけでも精一杯なのに、自分からしろと！？
こんな甘すぎな雰囲気の中で？
どんなハードルの上げ方？！

相変わらず唇を撫でている圭介さんは、何も言わない。
きっと、私が気付いているのを知っているから。

私は一度ぎゅっと目を瞑ってから、勢いをつけて顔を上げた。

突然の動きに、圭介さんの指先が私から離れる。

そしてそのまま――、目も瞑っていない圭介さんの唇に自分のそれを思いっきり押し付けた。

うちゅっ

てな、感じで。

すぐに離れて、大きく息を吐き出す。

ややや、やった！ やったよ、私！

任務完了！

ぎゅっと拳を握り締めてガッツポーズ体勢の私の後頭部に、大きな掌が副えられた。

「……ん？」

やっと甘い雰囲気から逃れられるとほっとしていた私の顔が、ゆっくりと持ち上がる。

そしてそのまま……

唇に、柔らかいものが触れた。

ドアップ圭介さん、付きで。

小さく聞えるリップ音が、鼓膜から頭の中を刺激する。

任務完了したよねえ?!　なんていう叫び声も、触れる唇に阻まれたまま。

幾度か唇を合わせた後、少しだけ離れた圭介さんがじっと私を見下ろした。

「嫌なら、言って?」

「え、と」

「俺とキスするの、嫌?」

少し寂しさを滲ませた声に、慌てて首を振る。

「嫌じゃないっ。そうじゃなくて、恥ずかしいっていうか……っ」
熱っぽい視線に、恥ずかしさから早口でまくしたてる。

「そう。なら、よかった」

……なら、よかった?

思わず脳内リピートかました私の唇に、再び柔らかいものが押し当てられた。

どアップ圭介さんに耐えられなくなって目を瞑れば、唇の合わせ目をぬるりと生暖かいもので辿られてびくりと体が跳ねる。

それを押さえ込むように、いつの間にか腰に回っていた腕に力をこめられた。

恥ずかしいけれど。

圭介さんに触れられて、嬉しいと感じている自分もいて。

確かに流された気もしないでもないけど、でも――

すると、ふっと唇から温もりが離れた。

「嫌？」

「あ、え？」

他の事、考えてる。

そう言われて、なんて答えたらいいのか分からなくて。ただ、じつと圭介さんを見つめていた。

「由比」

呼ばれる名前に、問い返すような視線を向けたら。

「嫌？」

ぽつり、と問いを向けられて。

「いや、じゃ、な……っ」

そう答えたら、再び口を塞がれていた。

当然しゃべり途中の口は開いたままで、何の躊躇もなく、圭介さんの舌が入り込んでくる。

「んっ？」

驚いて声を上げて、全て口の中で消えて。

喉の奥で呻くような、そんな音しか漏れてこない。

歯列をなぞり舌を絡め取られて、口を閉じる事すらできない。

口の端から飲みきれなかった唾液が、肌を伝って行く感覚さえ体から力を奪っていく。

微かに息がし易くなった事に気付いて目を開ければ、私を見つめる圭介さんと目があった。

「は、……けいすけさ……」

名前を呼ぼうとしたけれど、最後まで言い切る事ができず再び唇を重ねる。

角度を変える度に深くなる行為に、頭も呼吸も感情も追いつかない。

ただ、ただ――

そこまで求められる事が、嬉しいと、漠然と感じた。

しばらく。

どのくらいの時間、そうしていたのか分からない。

ゆっくりと身体を離れた圭介さんに促されるまま、ぺたりと座り込んだ。

ふかふかの掛け布団がめくられた、敷布団の、上。

力が抜けきった体は、動かす事さえ億劫で。

布団の上にいるの間に聞いたことに少し驚いたけど、それは霞んだ意識の向こうで、だった。

ぼーっとする私の横に、圭介さんが腰を下ろす。

「ねよっか」

にこりと笑う表情は、いつものほんわか圭介さん。

さつきまでが、別人かと言いたくなるほど。

「ふえ？」

言われた意味が分からずに間抜けな声で聞き返せば、肩に回った腕に押されて敷布団に転がった。

そのまま布団を掛けられて、ぎゅっと抱きしめられる。

目の前には、浴衣。

圭介さんの胸に、顔が押し付けられた。

「今日は、ここまで」

「ここま、で？」

いくらなんでも、鈍いといわれようが子供といわれようが、「大人の恋人」が何をするか位は分かっている。

この状態で終わりって、さすがに圭介さん辛いんじゃない……

考えていた事が伝わったのか、お見通しくらい雰囲気で駄々漏れなのか、後頭部に回った掌がゆっくりと頭を撫でた。

「由比さんが、もう少し俺に慣れてくれるまで待つから」

「圭介さん……」

「ね？ 恥ずかしがり屋の由比さんが、今日は頑張ってくれたんだと思うと素直に嬉しい。だから、待つよ」

そつと顔を上げれば、穏やかに笑う圭介さんと目が合って。

やっぱり、大人だなあって。優しいなあって。

そんな事を思いながら、大好きと一つ零してその胸に擦り寄った。

「……もう少しだけね」

寝た後に言われた言葉なんて、全く知らないけど。

「さてと、そろそろ行こうか」

「うん」

朝までぐっすり寝た私は、置き拔けにキスをされた驚き以外は、いたって穏やかな心中だった。

確かに昨日からこっち、なんだかめまぐるしかった気がするけれど、圭介さんは本当に嫌がる事はしなかった。

あの状態でも、私の気持ちが追いつくのを待ってくれるとって、ただ抱きしめて眠ってくれた。

流されたからといって、自分の意思でこの状況の中にいるわけだから、何をされても文句は言えないというのに。

やっぱり、圭介さんは優しい。

穏やかで、大人の人で。

「どうしたの？ 由比さん」

いつの間にかまた、さん付けに戻っていて寂しいけれど、たまに呼ばれるからこそ特別に思えるという事もあるし。

私はへにやりと笑うと、なんでもないと言った。

「圭介さんってば、本当に優しいなって思ってた」

幸せ、と、呟くと、触れるだけのキスが降りてくる。

昨日から幾度か交わしているからか、恥ずかしいよりも嬉しさが勝ってくる。

だから逃げずにちゃんと受け入れると、圭介さんも嬉しそうに微笑んでくれた。

「そう言ってくれると嬉しいけれど、あまり全面的に信頼されても良心の呵責が疼くかな」

「良心の呵責？」

くすりと笑うその目が、ゆっくりと細められた。

眼鏡越しだというのに、その視線が強く自分に注がれているのが分かる。

ん？ 何か雰囲気が……？

「由比」

あれ？ 名前……？

「早く、俺に慣れた方がいいよ？」

え、何？

いきなり変わった雰囲気になだ目を見開いて圭介さんを見上げていたら、指先で頬を撫でられて背筋に昨日の夜みたいな不可解な痺れが走った。

「待たされた分だけ、大変なのは……由比の方だから」

そう言って笑みを浮かべる圭介さんの視線は、全く優しくありませんでした。

そしてその“大変さ”を知る事になるのは、そんなに遠くないオハナシ。

10 (後書き)

圭介がずる賢いのか、由比が鈍いのか。

翔太よりも、圭介の方が近くにいたら困る相手に思えてきたのは気のせいだろうか……？

これにて完結、ありがとうございました！

ご説明をば

皆様、いつもお読み下さりありがとうございます^^

この度めでたく、「きつと、それは」本編がお気に入り登録600件を到達いたしました。

また、ユニーク25万アクセス・PV125万アクセスを超えさせて頂きました。

全ては、お読み下さる皆様のおかげです。

書き始めはこんなに長くなる予定ではなかったこのお話、紆余曲折どころじゃなく上下左右斜め上に斜め下まで入れられちゃいそうなくらい、遠回りに更新してて本当にすみません。

自分でも、あれ、ここまで深く書くつもりでしたっけ？と、思わず敬語になってしまいそうなくらい驚きの出来事です↑書き手なのに

(笑)

それでも書き続けてこられたのは、皆様のおかげと心より感謝いたします。

さて。

この度600件ピッタリになりました(多分昨日か今日)、記念に前に頂いたアンケート結果より「桐原×由比 パラレル」を投稿したいと思います。

翔太も書いているんですけど、桐原の方が書き終われたので^^

前回、圭介と由比は2日間ぶんのお話を書きましたが。

今回、数時間分のお話です。

いやいや、差別してないよ↑ナイヨ↑遠い目

いやー、やっぱり職場恋愛ですから。

ねえ？（笑）

書いてみたいよ、オフィスラヴ！！

R15ぎりぎりで書きます。

でーぷちゅーが、ボーダーです。

ただ一言言いましょう。

「桐原は、圭介や翔太と違って直接的・行動的・ツンデレ的！」

圭介のように甘ったるい言葉は言わないし、翔太のように母性本能をくすぐることも言わない。

ただ、読んでこそばゆくなるくらい直接的な言葉を吐くと、お読み下さる皆様お覚悟の方よろしく願います（笑）

だって書いてて、ワタクシ篠宮楓、桐原を投げ飛ばしたくなりました（笑）

お気に入り登録が600件って数字の間に、さかさかと新規投稿してしまいます^^

そのあと500件台になっても、まあまあと笑ってくださいな♪

で、前置きが長くなりました！

さてここからが、本題です！
いつものアレです！

脳内インプットのご準備はよろしいでしょうか！

「由比と桐原は、付き合っている」

本編では、違う展開になってますがここでは！ここでは、桐原と由比は付き合ってます。

たった数話ですが、桐原に夢を見させてやってください（笑

それでは皆様、お楽しみいただければ幸いです。
いつもお読み下さり、本当にありがとうございます。

篠宮 楓

1月13日

桐原は、最近不機嫌だった。

超過保護偽兄貴と縋りつく腹黒偽弟を何とか出し抜いて、由比を手に入れたまでは良かった。

どんな僥倖、あの時まで信じた事もなかった神様って奴に、ほんの数%感謝した。

新人研修から気になっていた入社一年目の上条 由比は、ちまっこくて元気でそれでいて空気を読む意味可愛い後輩だった。

空気の読み方に偏りがあるのに気が付いたのは、所属部署が隣で昼を食べる上条と都築の間に乱入するようになってからだが。

上条は、自分の事に関してだけまったく空気を読めない。

鈍いと言ってしまうばそうなのだろうけれど、それだけじゃないことは薄々感づいていた。

自分に対しての感情、こと恋愛に関してどうしてこいつはこんなにも臆病なのだろう。

その理由は、付き合い始めてようやくと知ることが出来たけれど。だから、無理強いとかしたくないんだけど。

……手を出したいのに、出せる雰囲気を持っていけない。

二十八歳桐原悟の頭を最近ずっと占めているのは、中学生か高校生かとも突っ込みたくなるような悩み事だった。

「上条、まだ帰らないのか」

とある日の、夜。

桐原が帰ろうと室内の戸締りをして人事課を出ると、隣を使っている総務課のドアから光が漏れていた。

由比が電話番号という名の残業当番だったのは昼食の時に聞いていたから、そのドアを何の躊躇もなく開ける。

残業は八時まではずなのに、なぜ桐原でさえ帰ろうとしていた九時近くに由比がいるのかが不思議でなかったのだ。

由比は突然開いたドアに驚いて顔を上げたまま、目をぱちぱちと繰り返す。

彼女の、びっくりした時の癖。

キスでもしたら、どんな反応を返すだろうとそんな事を思いついて、桐原は内心苦笑した。

俺は好きな女苛める小学生か。

その通りとかふんぞり返って文句を垂れる皆川という鬼婆が脳裏を掠めて、ぶるぶると思わず頭を振って追い出す。

そして驚いて固まったままにいる由比に近づくと、徐にその頭に手を伸ばした。

「おい、聞いているのか？　ねずみ」

「……っ」

懐かしいあだ名を口にすれば、どこか拗ねる様に口を噤んで椅子から立ち上がった。

「聞いてますよ、桐原主任。もう帰ります。後は荷物を地下の倉庫に持ってくださいなんで」

机のわきに置いてある段ボールをポンと叩いて桐原を見上げる由比の言葉に、あっそ、と軽く返事をしてそれを小脇に抱え上げた。

「帰る準備しろよ。これ置いたら、アパートまで送るから」

驚いて遠慮する由比の行動を先読みした桐原は、さっさとパソコンの電源を切ると由比の荷物も片手で持って総務を後にした。

随分慌てていたのだろう。

別に置いていくつもりはなかった桐原は、廊下の奥、地下へと降りる階段わきで待っていたのだが、総務課から出てきた由比に思わず苦笑した。

片手に掴んだジャケット、慌てて履き替えたのだろうパンプスはかかとがちゃんと入っていないし。

なのに戸締りだけは確実にやろうとする由比が、面白かった。いや、本心言えばとても可愛く見えた。

だからまあ、我慢してるところがあんだよな。

そんな事を考えながら、由比が近づいてくるのを見遣る。

例えばさ。

俺は二十八歳で、まあそこそこ経験つーもんを積んでますからね。学生の恋愛じゃないんだし。

付き合えば、精神的にも肉体的にも近づくわけですわ。

口に出さなくても、雰囲気でそーなるもんだろ。

いうか？ 洋画のセリフみたいに「キスしたいんだけど」とか。

いわねえいわねえ。

抱きたいとか？ いや、抱擁的な意味じゃなくてだな。

悪くいやあ、なし崩し？

よく言えば空気と状況読むだろう。

それがどうだろうな、この女。

そんな雰囲気を持っていけない。全く。

恋愛に消極的だと、言っていたし現にそうだった。

それを取っ払って、手に入れたのは俺。

独りで生きていくつもりだったといわれて、有無を言わず手を掴んだのは俺。

だから、待つべきとは思ってる。

それでも隠せないイラつきは、往々にあって。

本当に、俺と付き合ってるのかと言いたくなるのをなんとか我慢している。

だけど。

「ごめんなさい、です」

待たせて、とかいいながらおどおどと俺を見上げてくるこの表情とか。

身なりよりも、俺を待たせる方に意識が向いている心持とか。

そういうの、可愛いと思えてしまうから、俺は待つことが出来る。

なんとか、な。

「ああ、別に。ドア開けろ、俺両手塞がってる」

頭にぽんと手をのせたいけど、荷物と由比の鞆を持っている俺には叶わない。

由比はその言葉に、慌てて地下階段に出る鉄製のドアを開けた。

ギギッと、ホラー映画にでも出てくるような効果音の後、ヒンやりとした空気が流れてくる。

そのドアをくぐりながら、前にあったことを思い出した。

由比も同じだったらしく、二人で目を合わせて苦笑する。

「女の嫉妬は怖いと、実感した日々でした」

そう由比がぼやけば、桐原は荷物を持ち直す。

「悪かったよ、ホント」

流石にぶっきらぼうな桐原でも、あの頃の事は由比に謝るしかできない。

桐原とのうわさを流されて、いつの間にか標的になっていた由比。それを知らず、のうのうと由比とかかわっていた桐原。

あの時ほど、自分が情けないと思った事はない。

「いいんですよ。もう、過去の事ですから」

地下について歩き出す由比が、はにかむ様に笑う。

その恥ずかしさというのが、今のこの関係から来ていると思えば気分は良かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3376w/>

「きっと、それは」のほかのおはなし

2012年1月13日19時54分発行